

## 自然と人：稲作文化における生物多様性保護の道

復旦大学 鄧愛

稲は生命の続きであり、食糧の源であり、そして人と自然との融合の証人です。

時間の長い流れの中で、ある文化がちょろちょろとした流れのように、日本の大地を流れています。人と自然が共生する知恵を載せたその流れこそ、稲作文化です。稲作文化は日本の農業の伝統の重要な構成部分であり、日本の文化と生活様式を象徴するものでもあります。この稲作を中心とする文化体系の中で、自然と人との関係が具現化されるとともに、持続的発展が可能な生物多様性保護の道も示されています。

人類学者の大貫恵美子さんに『コメの人類学 日本人の自己認識』という著書があり、その中で稲作の日本の文化における独特な地位を探求しています。同書では歴史文献、民俗学資料の研究を通じて、稲作文化の日本で変遷してきた過程が示されています。古代の神話の伝説から近代農業まで、皇室から民間まで、祭祀から他の習わしまで、稲がきわめて重要な役を演じているのです。この本を開くと、まるで時間の長い回廊を通り抜けて、古い日本に歩み入るかのようです。そこでは、時間がきめ細かい手がかりのように、古今を通じて人々の稲作に対する探求と伝承を貫いています。稲作の背後にある歴史は不朽の詩で、日本人がその土地と付き合ってきた歴史を記録したものです。時代ごとに勤勉な耕作の足跡を残し、稲作文化の伝承する強靱な意志も作り上げた大作です。

稲作文化の日本での歴史は、古代の深遠な年月までさかのぼることができます。水稻と栽培技術が中国から伝来すると、日本の各地で栽培が始まりました。日本人の生活様式が採集と狩猟から農耕へと転換し、人々が山林から低地、河川の傍へと移動して、独特で豊かな稲作文明を形成したのです。

稲作は日本の文化の中で崇高な地位を占め、一族の伝承する宝と尊ばれました。米を好む日本人は、米を材料とする「ご飯」の飲食方式を身につけました。米は複合炭水化物、蛋白質、脂肪などの栄養成分に富んでおり、人が必要とするエネルギーの重要な供給源です。また健康の維持にきわめて重要なビタミン、

ミネラルも豊富です。米を主食とする飲食様式は日本人の長寿と健康の秘訣の一つとも考えられています。

稲作文化の伝承は生活様式にとどまらず、ある種の生態の倫理の延長でもあります。米は日本人の主食として、彼らの生活感と文化的アイデンティティを背負っています。栽培から収穫まで、炊事場から食卓まで、一本の生態系の鎖が通っており、人、土地、食品をしっかりと結びつけています。穀物の豊作は人々の衣食の需要を満足させるだけではなく、重要な祝日や儀式に深く焼き付きました。初夏に田植えし、夏には田んぼでカエルが鳴いて、秋に稲穂が熟し、冬には餅つき。諸神の祭祀が稲作と強く結びついています。豊年祭、稲荷祭などのお祭りで、人々は大地に感謝の思いを表して、自然の恵みに対する敬慕の念も見せます。米は単なる食物ではなく心のよりどころであり、人々の豊作、幸福と生活の安定に対するあこがれが載っています。

稲作文化の伝承には豊かな知恵が含まれています。伝統的な稲作文化の中で、農民達は繁雑な農作業を通じて自然と融け合い、自然の法則に適応した農業技術と管理方法を形成しました。彼らは注意深く天候の変化を観察して、土地の声に耳を傾け、自然の法則によって農作業を行います。時期を選んでの田植え、灌漑の把握、水位の調節などです。彼らは合理的に水資源を利用し、湿原の生態系のバランスを維持する方法を理解しています。どのように輪作や休耕を行えば、土地の肥沃さを維持して、土地の極端な消耗を防げるのかも知っています。耕地を一つの自給自足した生態系にしたのです。こうした人と自然の関わり方には深い生態系との共生の観念が反映されているため、人が生態系の破壊者とならずその一部分となって、共に自然の生態バランスへと関わっていきます。

稲作文化は耕地の生態系に影響するだけではなく、農業全体の生態系の保護を積極的に推進する働きもしています。伝統的な稲作文化において、人々はよく稲を他の農作物と結び合わせ、多様化した農業の生態系を形成してきました。水稻、魚類、昆虫などの多種の生物を含んだものです。田んぼは良好な生活環境を提供しています。田んぼの水は植物の根系を通して効果的に吸収され利用されるだけでなく、水質の浄化により水体の生態の健康を高めることもできま

す。稲の根は土壌に深く入り込んで、土壌微生物に生息地を提供します。稲からは昆虫達の郷里になり、水中では多くの魚類が繁殖して生存し、生態連鎖の見事な楽章を形成します。この湿地の生態系の存在により、たくさんの稀少種の生息地が保護され、生物多様性がその土地で継承され繁栄していくことができます。田んぼは農民達の働く場所であり、虫、魚、鳥獣が生息し繁栄する天国でもあります。稲作文化は花冠のように、各種の生物を一つに編み込んで、和やかに共存させます。

日本の土地で、稲作文化は古くて神秘的な絵巻さながらに、延々と続いて、人々の心の深くに根を下ろしています。稲作は生命の恵みだと見なされ、豊饒とめでたいことを象徴しており、母なる大地の惜しみない贈り物です。農村で鼻をくすぐる稲の香りは、人と土地の共生共栄の叙事詩を歌う自然の歌のよう。稲を植えて、刈り取って、実り多い成果を楽しむ営みは、単なる農作業ではなく、ある種の生活の儀式、自然への感謝なのです。稲作は日本人が心のよりどころとする象徴になり、過去、現在、未来をつなぐ時空の絆。

日本の稲作文化の中では、人が自然と共生する知恵を感じられ、人が自然と付き合いの中で体得した哲学の思考も見られます。稲作文化は農業の発展というだけではなく、生命の詩、人が自然と共作した叙事詩であり、持続的発展が可能な生物多様性保護の道を提供してくれます。この土地で、稲作文化は感動を呼ぶ楽章のように、人と自然が和やかに踊るビジョンを呼び起こします。私たちはこのメロディーの中で軽やかに舞って、生態系との共生の精神を伝承し、生物多様性の新たな章を引き続き作って、自然と共に歌うのです。

読んだ書籍：大貫恵美子『コメの人類学 日本人の自己認識』、石峰訳、商務印書館 2015 年版。